



春燈

10月号

October 2014

主宰の句

安立公彦

目に結ぶあまたの蜻蛉敗戦日

初鳴きと歩を止め聴くや法師蟬

遠ざかる濤音ばかり秋の浜

爽やかに大仏は影伸ばしをり

読み返す幾たびの書や鬼貫忌



成瀬櫻桃子の句

茨木の腕の重さべつたら漬提げ

『素心』昭和五十六年

四十八年頃のべつたら市は、コートの着始めといわれ、やや寒さを感じながら縄で縛ったべつたら漬を提げ夷布等ひやかしているうち意外な重さになってきます。そのべつたら漬を茨木の腕と見立てる自由さ、講談社の絵本の世界が広がり子供の頃に引き戻されます。櫻桃子先生は夜長をお子様絵本を読み聴かせて、ひとときの安らぎに身を置いておられたのではと思います。

小張志げ

成瀬櫻桃子の句

夜の蟬人の世どこか食ひちがひ

「春燈」昭和五十三年

夜に蟬が鳴くのは、嘗ては偶発的な現象で、また独特な風情も有りました。それが近年頻発的に発生すると共に、個体の数も増え問題化されています。その原因は、日本の経済成長に伴って「闇の消失」と言う状況を生み出し、蟬の生態系を乱した事です。虫の世界では自然の状態に忠実です。一方、人間の世界ではそうも行きません。行き掛りとか思惑とかが、渦を巻いているのです。

鈴木撫足

燈下集



○ ト部 黎子

空蟬の刹那を生きし爪なりけり
走馬灯数へきれざる恩を知る
四万六千日触れ合ふ傘の波くぐる
影先立て木の間隠れの黒揚羽
仲直りにこぼすはにかみ灸花

○ 卯木 堯子

手を浸し清水の鏡崩しけり
狂恋のオーラ醸せり凌霄花
良心の見張番棲む月涼し
鰻照る檜香れる輪つば飯
搜す術無き尋ね人道をしへ

○ 深川 敏子

出てきたるテレフォンカード更衣
梅雨上がる黄昏長き副都心
すれ違ふ少女の八重歯夏帽子
干梅に星の雫のひかりけり
流灯のもつれし二つ妹と弟

○ 吉澤 恵美子

地下鉄の下を地下鉄梅雨深し
ハチ公の黙す渋谷の男梅雨
肌脱の将棋佳境に入りにつけり
蛍火の一つ離れて灯の強し
誰がための海の青さや沖縄忌

○ 和田 幸江

篁の風のねぎらひ夏座敷

扇ぐたび団扇の写楽にらみけり

鷗外忌航跡しるき外国船

梅雨寒や鉄錆にほふ操車場

サングラスいろいろ掛けてみて買はず

○ 大室 恵美子

透明も入れて七彩夏料理

曖昧な返事は嫌ひビール干す

死ぬるまで私でぬたし夏の月

この世への天の戒め雹降り

仏法僧己が符と鳴き交はし

○ 尾野 奈津子

夕闇の水の匂や草蚩

闊達な筆の文恋ふ青葉闇(悼・英伴様)

沙羅散華棲む世違へし人を恋ふ

夕蓮の閉ち忘れぬる一花かな

ガウデイのあふるる街や夕焼くる

○ 小嶋 恵美

曾祖父の頃の礎石やつばめの巢

羽抜鳥望洋の眼を細めけり

夕光や瀬戸の渚の裸子に

我のみに遮断機降りる暑さかな

晩夏光笑顔返して知らぬ人

○ 三宅 文子

ぬばたまの闇ぬれてきし恋蚩

鳴けぬゆ糸いつさう光る恋蚩

白地着て立居に風の生まれけり

三味線屋のぞき片陰歩きけり

肌脱ぎて祭の顔を作りけり

○ 太田 慶子

嬰の目の風鈴の音を追うてけり

ていねいにやがてあつさり帰省の子

母をふときれいと思ふ夕端居

日盛や億劫さうに雲のゆく

サングラス己の少し遠さかる

当月集

安立 公彦選



○ 西岡啓子

うちなびく夏草の丈敦の忌

初蟬や日々のくらしにやや慣れて (夫退院)

椅子一つ庭に置きある夜の秋

ひと気なき米屋に回る扇風機

風ぬくる竹百幹の晩夏かな

○ 川崎真樹子

母となる人に涼しく席譲る

忘れたきこと忘れ得ず髪洗ふ

乾きたる布巾の歪み八月来

水引草の赤き蕾や風の句点

根釣人去りて断崖屹立す

○ 中村紀美子

利休色流して暮るる梅雨の川

涼しげに草履揃ひし阿弥陀堂

蕉翁の座像涼しき川下り

夏草や追分道のしるべ石

いつせいに蓮の裏葉や風の道

○ 石橋邦子

神の田のいの一の初穂かな

田の上にくたびひらく遠花火

一本の大樹のしらべ蟬時雨

おしろいやさびしきときは群れて咲く

遺骨まだかへらぬ父や敗戦忌

○ 齋藤晴夫

白日傘含羞といふ言ありき

仙人掌の花咲く月光湧くやうに

守一の絵が好き曾孫は裸好き

新盆や花絵消えゆく絵蠟燭

幽明の継橋に居て盆供養

春燈の句

安立 公彦選

新涼や客の去りゆく靴の音

東京 横山さくら

ゆつたりと歩む母子や菊日和

マンネリの介護一喝落雷す
傘傾ぐ江戸の仕草や梅雨の道

東京 大西由美子

父母の脳裏に浮かぶ天の川

マンハッタンの夜景を囁す太花火ニギハヤヒ

東京 大西由美子

秋袷つま先ひたと合はせけり

夏歌舞伎英語で笑ひ取りにけり
スイングに酔うて踊つて明易し

東京 大西由美子

みちのくの風鈴を吊る旅ごころ

千葉 廣瀬 克子

女手の母思ひつつ蚊遣焚く

紐育ひとりつきりの日傘かな

三重 上野 進

未知の空一気のにぼる火花かな

己が影拾ひに降りて来る揚羽

三重 上野 進

二円切手のうさぎ見上ぐる盆の月

冷麦に色糸ありて佳き風来

三重 上野 進

ほたる追ふ棚田の闇の深さかな

群馬 小菅 澄重

空蟬の片足かしぐ影ゆれて

七星を氏素性とせり天道虫

兵庫 古川 幸子

姨捨の芭蕉の句碑や青田風

頃あひを訪ねて鄙の鮎料理
手習ひの幼き文字や土用干

兵庫 古川 幸子

今日の日は今日の力で端居かな

戸袋に出入りはげしや夏の蜂

兵庫 古川 幸子

デー・サービスへ夫機嫌よき大暑かな

神奈川 河本由紀子

三代の寄りてむつまじ夏館

朝刊のしめりて届く半夏かな
一杯の冷酒に夫の機嫌かな

兵庫 古川 幸子



余言

安立公彦

師の遠忌修す同門「てんとむし

松橋 利雄

去る七月五日、目黒祐天寺に於て、安住敦先生の二十七回忌法会が催された。安住先生のご逝去は、昭和六十三年七月八日だった。七月二十一日、祐天寺で本葬。梅雨の最中の黒雲が空を覆っていた。安住家の墓地はもともと芝白金にあつた。それが種々の経緯があつて、現在の祐天寺に改葬されたとのこと。それについては、「春燈」安住敦追悼号に、ご子息の邦男氏が書いている。

ご逝去の日から二十六年が過ぎたのだ。まさに「遠忌」である。祐天寺に着くと、すぐ先生の墓碑に詣でた。控室にはすでに参会の皆さんの姿が見える。同門十七名。黛さんや西嶋さんの姿もあつた。中庭に面した精進落しの和室はやや手狭である。しかし身を寄せ合いながらの話題は尽きなかった。まさに掲句の姿だった。この句、「てんとむし」が、「同門」をしつかりと支えている。

敦忌に参じたる夜の蛩かな

綱 徳女

この句も前句と同じ安住先生二十七回忌の法会の作品。法事を終えて帰宅する夜の道。作者はふと蛩の放つ青白い光の点滅を感じたのだつた。その夢幻のひかりは、遠い日の師の面影を彷彿させるのである。

『安住敦全句集』には、蛩の句は七句蛩籠の句が七句ある。その中の一句。へ寝るまへの蛩に水をあたへけり。昭和二十六年の作。『古暦』に収録。いかにも安住先生らしい句。作者もそういう思いで掲句を案じたのであろう。

ゆく雲を目で追ふひとりづつの秋 諸岡 孝子

「ひとりづつの秋」がいい。作者の住まいは気仙沼市。東日本大震災では甚大な被害を受けた地である。かつては遠洋漁業の基地だった。大震災による被災地の復興は困難を極めていることだろう。

今、作者を含む人達が海辺に出て雲を見ている。流れゆく雲は夏の日の雲ではない。その雲を見つめるそれぞれの人に、それぞれの思いが甦る。それを作者は、「ひとりづつの秋」と表現する。みごとな表現だ。

工事夫と稿ひ交はず日の盛

長谷川歌子

この句を見て、氣持の安らぎを覚えた。町場で見掛ける「工事夫」は、例えば道路工事人であったり、住宅の建築工事の職人だったり、いろいろな場合がある。

作者はその工事現場の前を通りながら、「ご苦労さま」と挨拶する。工事夫も応えて「暑いね」と返す。お互い見知らぬ相手である。しかしその懐いの言葉は、作者をも、工事夫をも、しばし安らぎの面持ちに導く。今の私たちは、こういう会話を、どこかに忘れていたのではないか。

扇風機大きくまはる法会かな

佐渡谷秀一

故人の追善供養は、夏場はことに多いように感じられる。むかしはこういう供養はそれぞれの家で行うことが多かった。親族の集う仏間には、老人から幼児まで、法事とは言葉賑やかなものだった。僧侶の読経が始まると、幼児も畏まって僧侶のまとう袈裟をじつと見つめている。開け放たれた座敷の扇風機が、大きな風を送ってくる。あの頃の夏は、家の中に這入ると、扇風機で十分な涼がとれた。

この句はお寺さんでの法会か。「大きくまはる」の中には、作者のさまさまな思いがこめられているのであろう。

手火花や火玉もだえて闇に果つ

棗 恰子

先日の新聞に、現代火花考とでも称するような記事が書いていた。それによると、三十九年前、安価な中国産の線香

火花の輸入が始まると、火花の三大産地である、長野、愛知、福岡の業者が次々と生産を止め、国内産の線香火花は、生産が途絶えた。それが十四年前に復活。現在の出荷量は百万本と、言われる。国産の線香火花は燃え尽きるまで、火花が、「牡丹」「松葉」「柳」「ちり菊」の四段階に変化するという。瞬時の火花に雅な名を与え、その名の火花の姿を見せるなど、日本の火花の技術の奥深さに感じ入る。

作者はそれを、「火玉もだえて闇に果つ」とする。みやびに片寄せらぬ、一途な写生の道が感じられる。これもまた手火花の一つの姿であろう。

竹林の深きより声梅雨あくる 篠原 幸子

この句を見ると、かつて訪れた鎌倉の報国寺の境内を思い出す。孟宗竹の林間が、幾重の波濤のように大きく重なっていた。辺りの静寂が心洗われるようだった。

作者の「竹林」はどこだろうか。この竹林も真竹か孟宗竹の林だろう。今その竹林を歩む作者に、その竹林の彼方から「声」が聞こえて来た。その声は作者の知らない他人の呼応。その短い応答のあとは、竹林に再び静寂に戻る。その瞬間作者は今年の梅雨明けをはっきり知った。この作者の句は、常に静謐で、そして内容は豊かである。